



光を漉く

- 和紙の可能性 -

01 途切れかけた和紙のまち

■ 海老根伝統手漉和紙 ー福島県郡山市中田町海老根

350年ほど前の江戸時代から受け継がれている伝統的工芸品。



1658年
紙漉きが始まる。
地域全体で生産
していたが、そ
の後途絶える。



1989年
保存会が立ち上
げられ、再び紙
漉きが行われる。



現在
職人の高齢化による
存続の危機

紙を白くするため、化学薬品で漂白することが多い中、海老根では薬品を使用せず、無添加で作っているため、時間の経過と共に白くなる特性を持つ生きている紙「生紙(きがみ)」と呼ばれている。

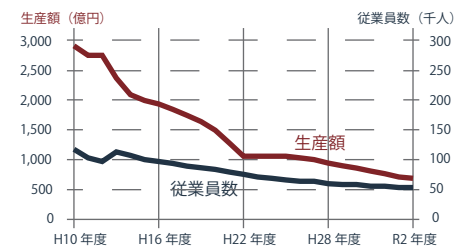
02 伝統工芸の現状

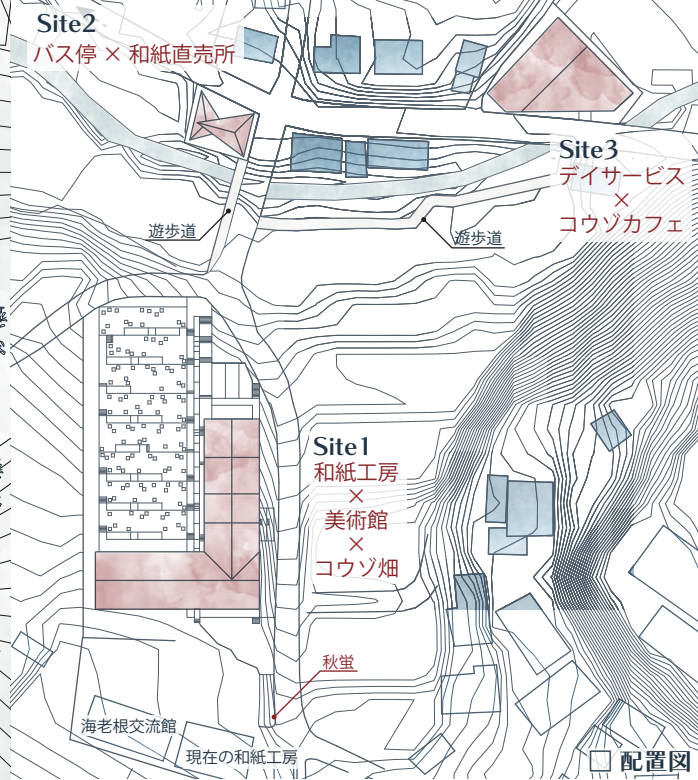
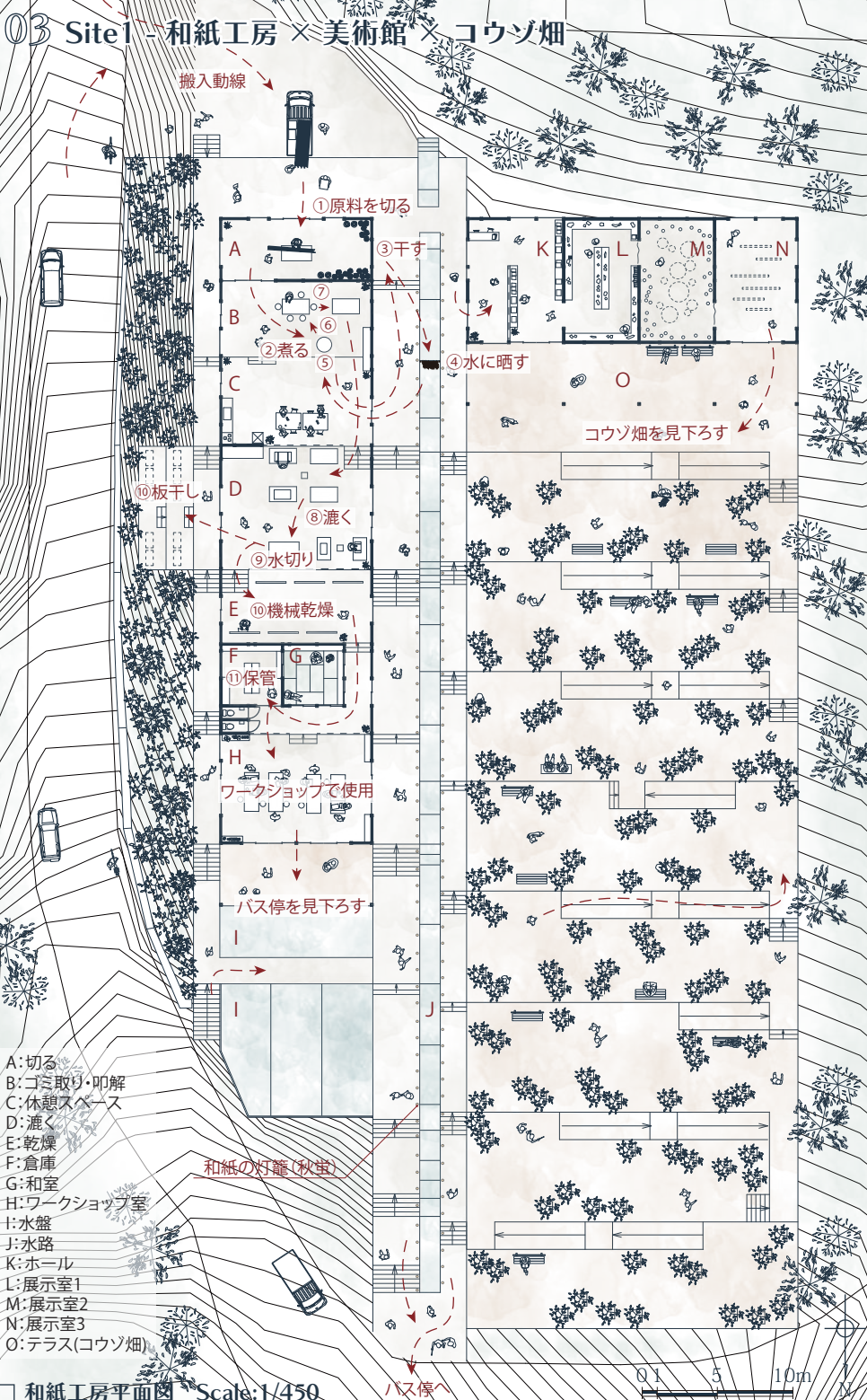
後継者不足 需要の減少 原材料・用具等の不足

後継者や原材料・用具等が確保できないと、伝統工芸品が製造できず、技術の継承が途絶えるおそれがある

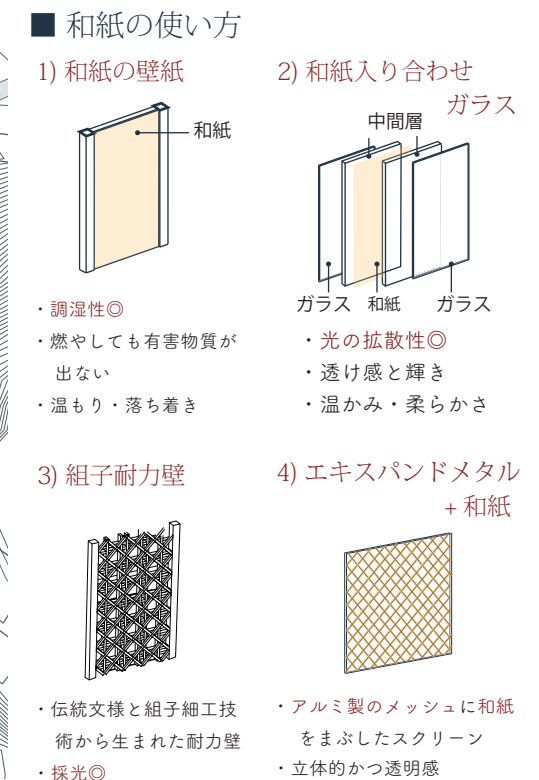
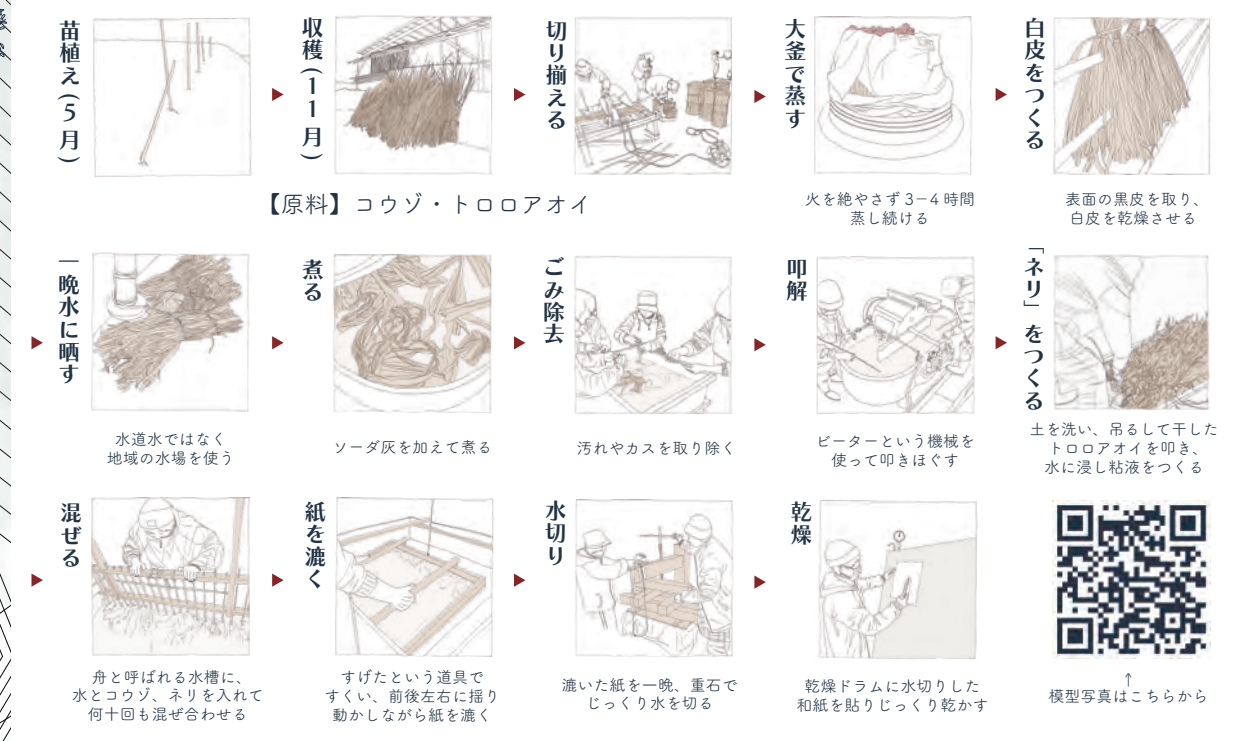
また、伝統工芸品は値段が高く“手の届きにくいもの”というイメージから若者の工芸品離れが問題となっている

- 伝統的工芸品の生産額・従業員数の推移 -



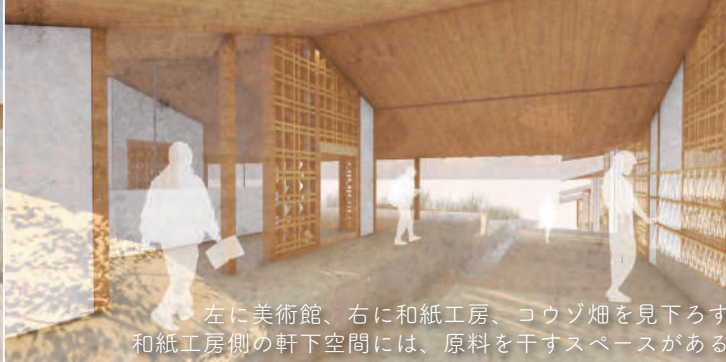


紙漉きの工程





コウゾ畑から和紙工房を見る



左に美術館、右に和紙工房、コウゾ畑を見下ろす
和紙工房側の軒下空間には、原料を干すスペースがある



道路側の軒下空間、北に見下ろす



左に水盤、右にコウゾ畑、間に水路を見る
ワークショップ室から続くテラスは浮遊感があり、バス停を見下ろす



美術館のテラスから、和紙工房・コウゾ畑を見下ろす



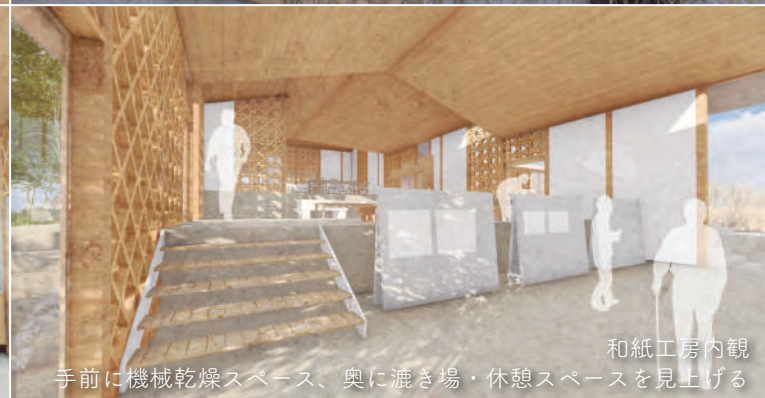
コウゾ畑から和紙工房を見る
夜は室内の明かりが和紙を通して柔らかく周囲を照らす



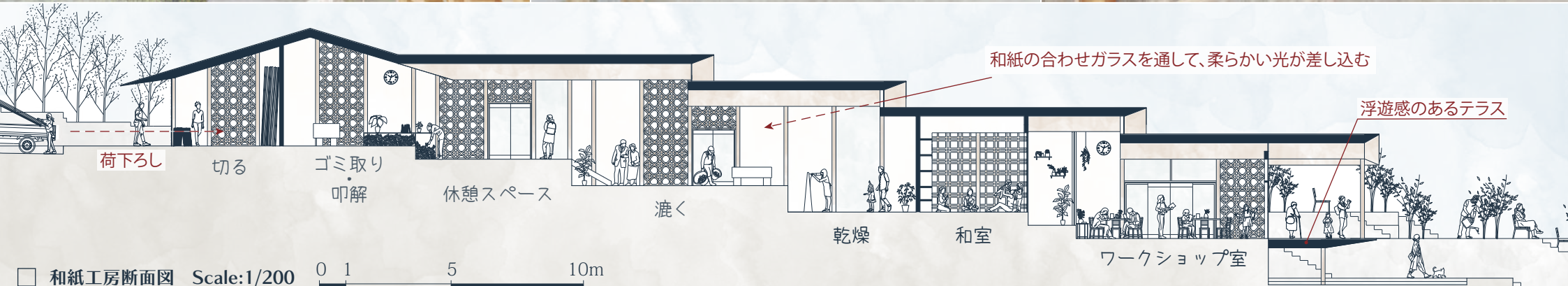
道路側の軒下空間、南に見上げる



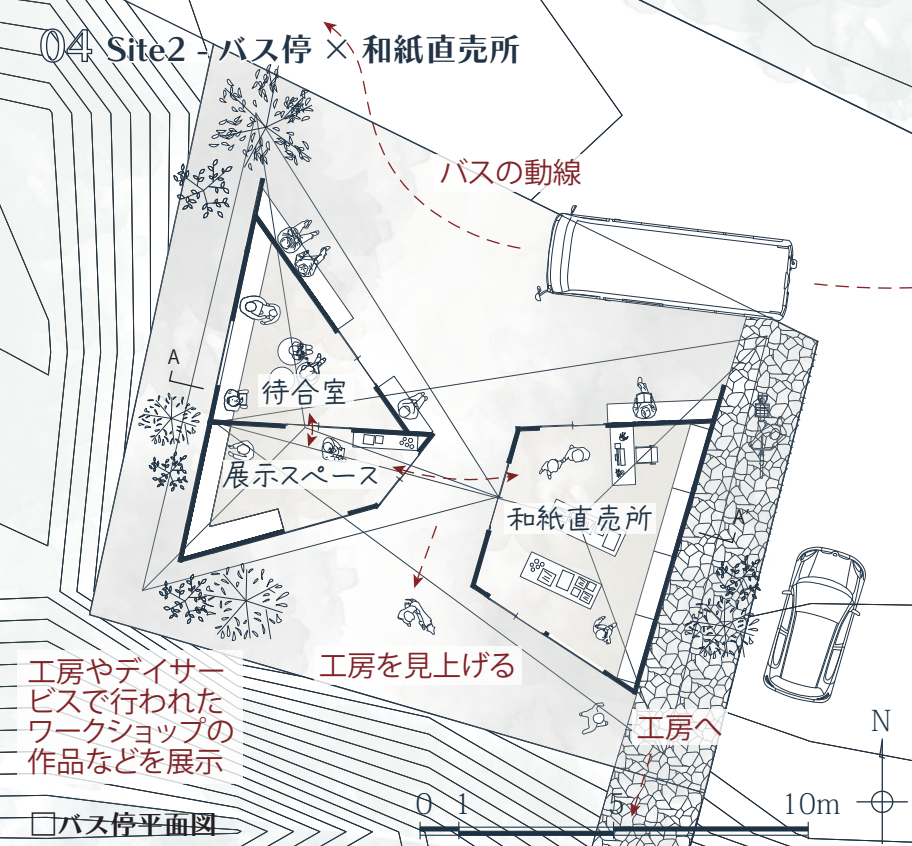
和紙工房内観
左に叩解・ゴミ取りスペース、奥に休憩スペースを見下ろす



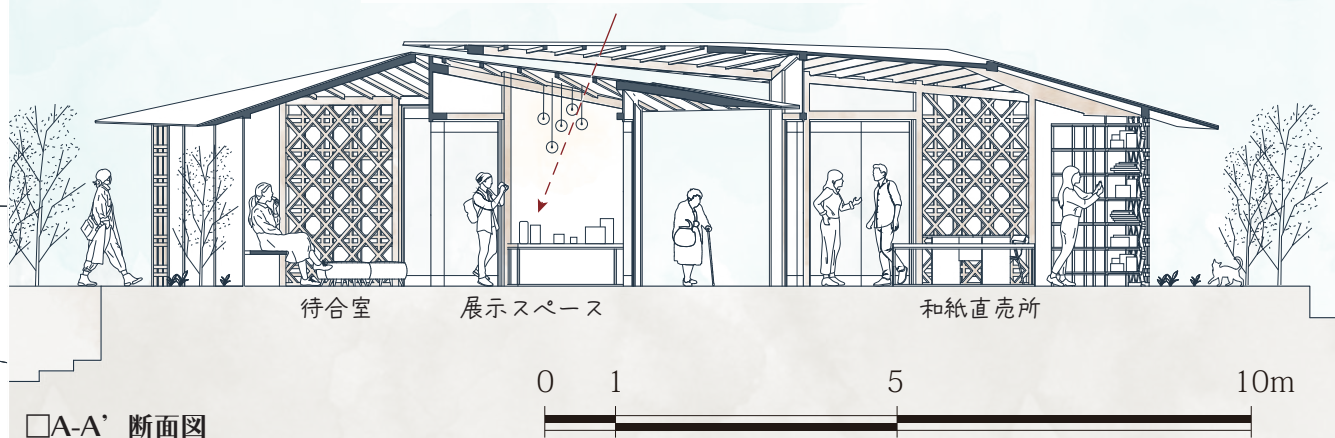
和紙工房内観
手前に機械乾燥スペース、奥に漉き場・休憩スペースを見上げる



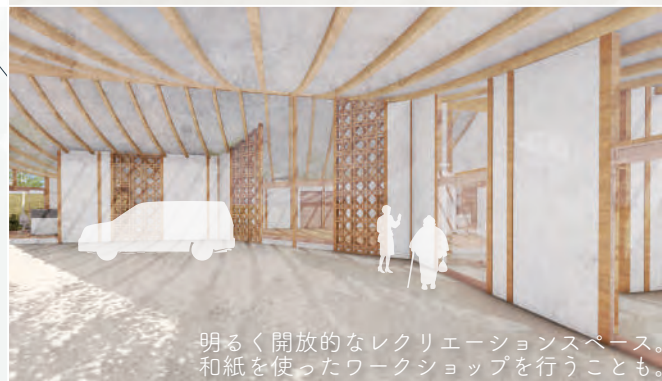
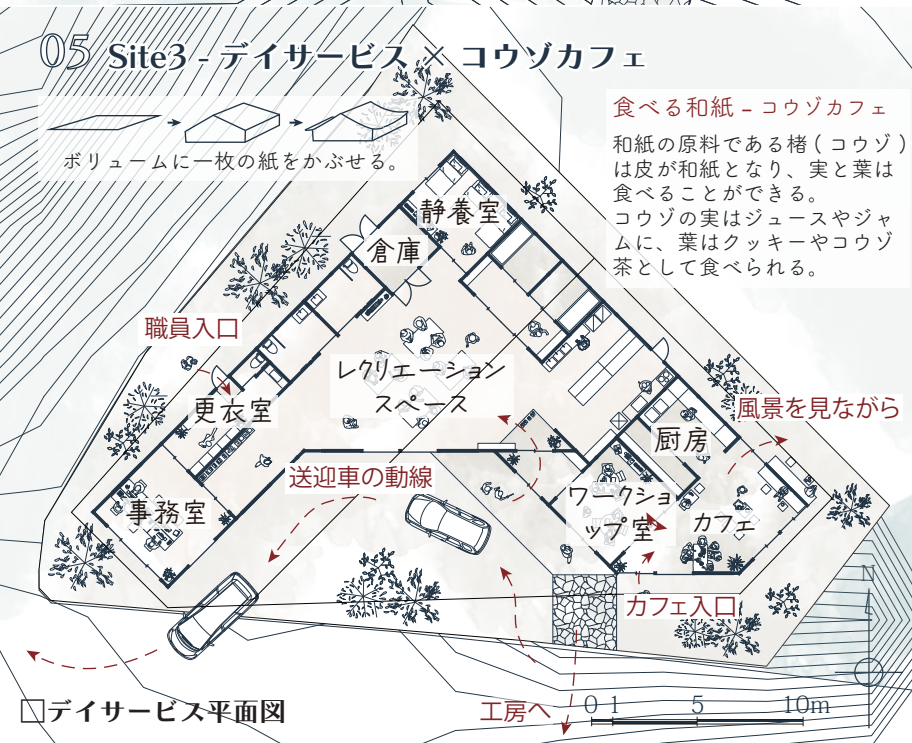
04 Site2 - バス停 × 和紙直売所



和紙の重なり方で光の入り方が変化する



05 Site3 - デイサービス × コウゾカフェ



和紙の屋根から柔らかい光が差し込む

一体的に使用できる

